

海外研究事情

## 世界の労働関係研究所・資料館・図書館(4)

労使関係研究協会(IRRA)全国政策フォーラムとミーニー・センター

五十嵐 仁

### はじめに

2001年6月6～8日、私はワシントンD.C.を訪問した。ワシントンの「オムニ・ショアム・ホテル」で開催される労使関係研究協会(IRRA)の全国政策フォーラムに出席するためである。

このワシントン訪問の機会に、アメリカ労働総同盟・産別会議(AFL・CIO)の本部やワシントン郊外のメリーランド州にあるAFL・CIO付属の労働者教育・資料センターであるジョージ・ミーニー・センター、プランゲ文庫のあるメリーランド大学の図書館などを訪れた。今回はこれらの訪問記を書くことにしたい。

### AFL・CIOへの訪問

まず初めに訪れたのはAFL・CIOの本部である<sup>(1)</sup>。本部はホワイトハウスの近くで、北側に

位置している。このビルはAFLとCIOが合併した1955年に完成したもので、8階建ての立派な建物である。この建物の8階で、アメリカの労働運動について色々と話をうかがった。



AFL・CIO本部の建物

中に入って受付で連絡してもらい、バッチを付けてエレベーターで8階に上がる。小さな部屋に案内され、コーヒーを出してもらった。しばらくして現れたのは若い女性で、いきなり流ちょうな日本語で「はじめまして」と挨拶され

(1) AFL・CIOについて、詳しくはそのホームページ<http://www.aflcio.org/home.htm>をご覧ください。文献としては、Philip S. Foner, "History of the labor movement in the United States", International Publishers, New York, 1980, Jo-Ann Mort, "Not your father's union movement: inside the AFL-CIO", Verso, London, 1998, Jack Barbash, "American unions: structure, government and politics", Random House, New York, 1967, Stephen P. Yokich, Donna Craft, Terrance W. Peck, "Profiles of American labor unions", Gale Research, Detroit, 1998,などを参照。スウィニー執行部成立以降の新たな動向については、ジョン・スウィニー [述]『アメリカ労働組合運動の現状』日本労働研究機構, 1997年, 柏木宏『アメリカ労働運動の挑戦 - 労働組合とNPOの世直し作戦』労働大学, 1999年, グレゴリー・マンツィオス編〔戸塚秀夫監訳〕『新世紀の労働運動 - アメリカの実験』緑風出版, 2001年,などを参照。

て驚いた。

国際部のスタッフでヴァレンチーナ・ジャッジValentina Judgeさんといい、連合の会議に出席して日本語で講演したこともあるという。大学で日本文学を専攻し、卒業してからしばらく日本の会社に就職していたそうだ。

ふと手元を見たら、ウェブ・サイトで公表している私の論攷を打ち出して持ってきている。久米郁男氏の著書『日本的労使関係の成功』に対する私の批判論<sup>(2)</sup>を読まれたそうで、「大変面白かった」と言ってくれた。メールでアポイントメントを取ったとき、「お前はジン・イガラシと同一人物か？」と聞いてきたのは、この論攷を読んでいたからである。

ヴァレンチーナさんとのインタビューは1時から2時間近くに及び、3時から会議があるということでうち切った。インタビューした内容は、AFL・CIOの機構と活動の概略、特にスウィニー執行部になってからの変化、最近の活動の特徴、とりわけ組合員を組織化する組織活動の状況、生活賃金運動の現状、ブッシュ政権に対するAFL・CIOのスタンスなどである。

残念なことに、ヴァレンチーナさんは対外関係の部局にいるということもあって、生活賃金運動などのアメリカの運動の最近の状況につい

てはあまり詳しくなかった。ただ、別れ際に「後で、今日の質問に関連した資料を送ります」と彼女は約束してくれ、この言葉通り荷物が送られてきた。中を見ると、生活賃金運動についてのシンポジウムの記録<sup>(3)</sup>や組織化研究所についての資料<sup>(4)</sup>が入っていた。インタビューが終わって出口まで送ってもらい、大きなタイルの壁画の前で撮ったのが下の写真である。



左がヴァレンチーナさんで右が私

AFL・CIOの本部を出たらすぐ横が公園になっている。公園の中で、日本人観光客らしき人が記念写真を撮っていたが、背景になっているのがアメリカの労働組合ナショナルセンターの建物だとは思ってもよらないことだろう。

この公園を抜けると、もうそこはホワイト・ハウスである。この間、1ブロックしかない。

(2) このとき、ヴァレンチーナさんが打ち出した論攷については、<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/iga2/kume.htm>を参照。これを短縮して活字にしたのが、拙稿『『日本型労使関係』賛美論を批判する - 久米郁男『日本型労使関係の成功』についての批判的論評』政治経済研究所『政経研究』第73号（1999年11月）である。

なお、久米氏の議論については、このほか、拙稿「労働政策過程の変容は何故生じたのか - 久米郁男『労働政策過程の成熟と変容』を読む」（2000年4月）<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/iga2/rousei.htm>、拙稿「何故、90年代の大変化を真正面から説明しないのか？ 水口憲人・北原鉄也・久米郁男編著『変化をどう説明するか：政治編』についての若干のコメント」（2000年4月）<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/iga2/henka1.htm>というウェブ上で発表した論攷がある。あわせて参照していただければ幸いである。

(3) 『THE LIVING WAGE SYMPOSIUM』November 19-21, 1999. これについては、[www.lafolle.wisc.edu/livingwage/](http://www.lafolle.wisc.edu/livingwage/)で読むことができる。

(4) AFL-CIO Organizing Instituteについての各種資料ならびに『Organizing Guide for Local Unions』などの文書。この研究所についてもホーム・ページがある。<http://www.aflcio.org/orginst/>を参照。

## 労使関係研究協会(IRRA) 全国政策フォーラムへの参加

夜半に強い音がして、目が覚めた。明るくなってから起きてみると、案の定、土砂降りの雨である。この雨の中、労使関係研究協会(IRRA)全国政策フォーラムが開かれる「オムニ・シヨアハム・ホテル」に向かった。

会場はホテルの会議室で、テーブルは9人がけの丸テーブルである。番号札があって、参加者のテーブルが指定されている。私のテーブルは16番で、左隣に座った人はデンマークから来たそうだ。労働省の役人で、「Head of Division」と書いてある。日本でいえばどのような地位に当たるのだろうか。

「9月には東京に行く」と言うので、「私も10月にはコペンハーゲンに行きます」と言い、「デンマーク労働組合のナショナルセンターを訪ねたいので、誰か英語を話す方を紹介してください」と頼んだ。彼の名刺をもらい、その後Eメールを送ったら連絡先を紹介してくれた。3カ月後の9月21日にデンマーク労働総同盟を訪問することになるが、これは彼が紹介してくれたおかげである。

私の右側に座った人は、アムトラック(長距離鉄道)など交通関係の労働組合の役員で、ワシントン郊外のメリーランドに住んでいるという。「メリーランドには、明日行く予定です」というと、「どこへ?」と聞く。「ジョージ・ミーニー・センターとメリーランド大学の図書館に行きます」と答えた。「ミーニー・センターは良いところだ。来週、そこを使ってうちの組合の研修会を開くことになっている。」

この人ともう一人レセプションで一緒になった人も国家公務員組合の役員だった。「Bureau of the Census」という調査・統計関係のデータを収集する国家機関に勤めているという。この人と話していたら、ハワード・ジンの書いた本<sup>(5)</sup>を薦めてくれた。アメリカ史について人民の立場に立って新しい解釈を打ち出した良い本だというわけだ。

「ハワード・ジンなら、彼の講義を受けたことがあります」「どこで?」「ハーバード労働組合プログラムに参加したときです」「ああ、エレイン・バーナードだね?」「彼女を知っているんですか?」「知っているよ。友達だよ」

これには驚いた。すごい顔の広さだ。もっと前に彼女に会って、私の訪問計画について相談すれば良かったと後悔した。早くに会って話していれば、色々な結びつきを活用できたかもしれない。

フォーラムの内容は、予想とは違って現代アメリカの労働政策や労使関係政策を幅広く議論するというものだった。ブッシュ新政権の労働政策を直接問題にするということはほとんどなかった。ニュー・エコノミーやグローバル化と言われるような新たな状況変化のなかで、労使関係はどうなっていくのか、働き方や職場の状況はどう変化していくのか、このような変化に対して労働組合や経営、政府はどう対応していくのか、というような問題が中心だった。

最後のセッションで、AFL・CIOの法対部長が出てきて報告したが、労働法の改革問題については全く触れなかった。「アメリカにおける労働組合の組織化にとって、組織化と組合結成

(5) Howard Zinn, "A Peoples History of the United States : 1492 - Present", HarperPerennial, NY, 1995. 本文に書いたように、ハーバード労働組合プログラムでハワード・ジンの講義を受けたが、そのとき、この本にサインをしてもらった。ジンのサインがあるこの本は、私の「宝物」である。

に大きな制約条件を課している労働法の改正は極めて重要だと思うが、何故、これを問題にしなかったのか」と、右隣の人に聞いた。しかし、彼もどうしてなのかは分からないと首をひねるだけである。

このように、フォーラムには、研究者だけでなく、労働組合の役員、政府の労働関係部局の役人、議員、日本大使館や韓国大使館からの外交官（名簿にはあったが、日本大使館から実際に来ていたかどうかは確認できなかった）、仲裁人など、幅広い人たちが参加し、報告した。これは、日本の学会などにはないユニークさだと言えるだろう。

もう一つユニークだと感じたのは、報告の後で、午前と午後に戻らず、参加者全員の討論の時間が設けられたことだ。丸テーブルに報告者がやって来て質問に答えたり、参加者相互で議論したりするわけである。

最後に、各テーブルの代表が前に出て行って、討論の内容について紹介する。私のいた16番テーブルでは、日本とデンマークの事例も紹介された。このような形で私も討論に参加し、それが会議の内容に反映されたわけだ。これは思いもかけない経験だったが、このような会議の開かれ方もかなりユニークなものだと言えるだろう。

参加者は全部で150人くらいと、それほど多くなかった。そのためにこのような形式も可能になったわけだが、これくらいの規模の研究大会の開催方式として、日本でも参考になるのではないだろうか。

### ジョージ・ミーニー・センター資料館

6月8日朝、目が覚めて外を見ると、昨日よりもずっと明るい気がした。どうやら天気は良さそうだ。朝の明るい日差しを浴びて、ホテルを後にした。

フォギー・ボトムの地下鉄の駅の前に、軽食を売る屋台が出ている。早速、ケーキのような甘いパンとバナナを買って腹ごしらえだ。飲み物を探したら、何と「緑茶」と書かれた缶がある。これを買って飲んだが、ちょっと甘い。よく見たら、缶の表面には「honey」と書いてあった。甘くしないと売れないのだろうか？それとも、甘くないと思った私の方が甘かったのだろうか？

地図を片手に地下鉄とバスを乗り継ぎ、ジョージ・ミーニー・センターに向かった。メトロ・センターでレッド・ラインに乗り換え、シルバー・スプリングという駅に降りた。どこかで見たような駅だと思ったら、正月にワシントンに来たとき、ワシントンからフィラデルフィアに向かうアムトラック（列車）が最初に停まった駅だった。

ここで20番のバスに乗り換え、終点がミーニー・センターだ。時間は30分ほどだろうか。バスの運転手は、私がミーニー・センターに行くと知ってわざわざ終点の先まで走って送ってくれた。「ここがミーニー・センターだ」と彼が教えてくれたところは、公園の入り口と間違えてしまうような緑の多いところである。



公園のようなミーニー・センターの入り口

ジョージ・ミーニー・センターは、AFL・CIOの組合員教育用の施設で、資料館や図書館も併設されている<sup>(6)</sup>。名前が冠されているジョ

ージ・ミーニーは元AFL・CIOの会長である<sup>(7)</sup>。  
 中に入って少し歩くと建物が見えてきた。左側の二続きの建物が、本部と資料館である。ここは図書館と資料館がはっきりと分れていて、別の建物になっている。



ミーニー・センターの本部と資料館

手前の建物が本部、その奥の建物が資料館だ。この資料館には、AFL・CIOをはじめ、各産業別組合の本部から、大会資料や本部書記局関係の資料が毎月定期的に送られてくる。

本部の建物に入って受付に来意を告げる。ほどなく、アーキビストのサラ・スプリングー Sarah M. Springerさんがやってきた。このサラさんが、ほぼ一時間にわたって私を案内してくれた<sup>(8)</sup>。

資料館の中は当然ながら資料だけで、単行本や定期刊行物は図書館の方にある。資料と図書は画然と区別され、アーキビストとライブラリアンの職務も明確に分れている。

しかもこの場合には、図書館より資料館の方が大きく、図書館の建物は本部と一緒にだが、資料館はその隣に独立した建物を持っている。

全国レベルの労働組合の資料保管庫としての意味が大きいからだろう。

この資料館の中で様々な資料を見せてもらったが、保存の方法などはウェイン州立大学のルーサー記念図書館などとほとんど同じだ。保存のために使っている段ボールの箱やケースも、以前に見たものと良く似ている。

資料の整理の仕方も、それほど大きな違いはない。関連資料をタイトルを付けたファイルにまとめ、それをそのままケースや段ボールの箱に入れて番号を付けている。このタイトルを目録にして整理番号を付けておけば、資料の請求があったときにケースやダンボールをそのまま持ってきて資料を出せばよいというわけだ。このやり方は、資料の整理・保管という点でも、公開・閲覧という点でも簡単かつ効率的であり、日本でも参考になるのではないかと思った。

また、文書資料だけでなく、映像資料や音声資料、大原社研では「現物資料」といつている「3次元資料」なども沢山ある。ある部屋にはテープが山のように積まれており、それを点検したり修理したりする部屋もある。フィルムの点検・修理のために使う特別な器具もあった。

「現物資料」の保存ためには倉庫のような部屋があり、そのキャビネットの中には実に多様な資料が眠っていた。大原研究所にも同様の「現物資料」があるが、その多様性と量の多さという点ではこちらの方が上だろう。

その「現物資料」の一つが組合バッジだ。大原社研にも戦前の組合のバッジ類が保存されて

(6) ジョージ・ミーニー・センターについて、詳しくはホーム・ページ <http://www.georgemeany.org/>を参照。

(7) ジョージ・ミーニーの略歴：1894年鉛管工の子としてニューヨークに生まれる。鉛管工になり労働組合運動に従事。34年ニューヨーク州AFL会長、49年国際自由労連の結成を指導。52年AFL会長。55年CIOとの合併でAFL・CIO会長。80年にカーランドに後を譲って引退。Archie Robinson, "George Meany and his times: a biography", Simon and Schuster, NY, 1981参照。

(8) サラさんは、ジョージ・ミーニー記念資料館のウェブ・マスターでもある。

いるがそれほど多くはない。このほか組合員手帳もある。中には使われていたらしく、はんこが押してあったり書き込みがあったりするものもあった。

この「現物資料」の中に、珍しいものがあった。AFLの創設者であるサミュエル・ゴンパースが愛用していたというパイプとケースだ。倉庫の片隅には、ひっそりと日本人形がたたずんでいた。日本の労働組合から送られたものだろう。いつ、どの組合から送られたものだろうか？

この資料館にも展示コーナーがある。ジョージ・ミーニー・センターだから、常設展示はミーニーに関するものだ。その他にも写真などを使った小規模の展示がある。この小規模の展示の準備はサラさんの仕事だという。

ミーニーについての常設展示のところに、ベナントなどが入っているガラスケースがあった。このケースは特注品で、ガラスも割れにくい特殊ガラスだそうだ。

本部と資料館の裏には研修に来た学生の泊まるドミトリーが3棟並んでいる。研究者などでも、この資料を使って研究する人が泊まるようだから、いつかはここに泊まり込んで、ゆっくりと資料を眺めてみたいものだ。

#### メリーランド大学のブランゲ文庫と図書館

ミーニー・センターでの見学を終え、再びバスでスプリング・フィールドの駅に戻った。今度はメリーランド大学に向かう。地下鉄のレッド・ラインで少し戻り、フォート・トッテンと

いう駅でグリーン・ラインに乗り換える。そこから3つ目の駅「College Park-U of Md」が最寄り駅である。

「College Park」というのは、メリーランド大学のある場所の地名で、「U of Md」というのはメリーランド大学の略称である。ここから大学の無料シャトル・バスに乗り、構内の学生センターのような所で降りた。学生がかなりいるのは、サマー・セッションがあるからだ。

シャトル・バスの中においてあった地図を見



ホーンベイク図書館

ると、ここから目的地のホーンベイク図書館<sup>(9)</sup>はすぐ近くだ。中に入って来意を告げると、私の名前を知っていてすぐに連絡してくれた。やって来たのがローレンさんといい、この人がこれからほぼ4時間にわたって私に付き合い、図書館を案内してくれた。

ローレンさんに最初に連れていかれたのが、マッケルディンという名前の別の図書館にあるブランゲ・コレクション<sup>(10)</sup>である。ハーバード大学現代日本資料センターの坂口さんから、ここには日本語を話すもう一人の坂口さんがい

(9) ホーンベイク図書館について、詳しくは、そのホーム・ページ<http://www.lib.umd.edu/HBK/hornbake.html>を参照。

(10) ブランゲ・コレクションについては、日本語のホーム・ページ<http://www.lib.umd.edu/PRC/prangejapan.html>がある。また、雑誌については記事索引があり、会員になればインターネットで利用できるようにになっている。占領期雑誌記事データベース<http://www.prangedb.jp/>を参照。

るとの連絡をもらっていたが、残念ながら、出かけていて会えなかった。



プランゲ文庫の入り口

もう一人の司書の方もこれから出かけるということで、最初に連れて行かれたわけだ。その方はエイミー・ワッサーストーム Amy Wasserstromさんといい、プランゲ文庫の中を案内してもらった。書庫にはビッシリと本が並んでいて、ここ以外にももう２カ所の書庫があるというから、大変な数になる。よく見ると、ところどころに紙が挟まれ、本が抜かれた跡がある。ここにあった本は、このとき、早稲田大学などでの展示会のために日本に「出張中」だった。

本には、検閲を受けた日付や出版点数、検閲の結果などが書かれた紙が挟まれている。この小さな紙切れが、実は重要な資料になるという。新聞の記事も一つ一つについて検閲され、許可されると「PASSED」の判が押される。許可にならなかった場合には他の記事と差し替えられ、検閲の痕跡が残らないようにされた。戦前の検閲であれば、白紙になっていたり伏せ字になったりして検閲されたことが分かる。占領軍の場合には、それが分からないようにされていたわけだ。

この後、再びホーンベイク図書館に戻り、ローレンさんから、図書館の中を案内していただ

いたり、アーキビストとしての仕事や処遇などについて、色々とお話をうかがった。このお話をうかがった場所は、彼のオフィスだ。彼は下の写真のような立派な個室を持っている。しかもそれは、彼だけではないという。



ローレンさんのオフィス

「この写真を見れば、日本のアーキビストは皆羨ましがるでしょう」と言ったら、彼は笑っていたが、この他の面でも大変恵まれているように感じた。たとえば、アーキビストとしての専門性は極めて高く、処遇においてもこの点はきちんと評価されている。

また、大学図書館の中では４段階の昇進が可能だという。これについて詳しくは、そのウェブサイト<sup>(1)</sup>をご覧ください。

彼らは自分から希望しない限り、大学の他の部局に回されるようなことはないという。ここでの仕事が嫌になったら、同じ大学の他の部局ではなく他の大学の同じ仕事に移るだろうというのがローレンさんの話である。

このような仕事の紹介や斡旋は、アーキビストやライブラリアンのそれぞれの団体を通じて行われる。両者はそれぞれアメリカ全国にまたがる別の団体に入っており、大学図書館や公立図書館などを渡り歩く専門的職業人としての地位を持っている。アーキビストについては、

(1) 大学図書館のホームページは<http://www.lib.umd.edu/index.html>である。

「the Society of American Archivists」という団体があるが、詳しくは、そのウェブサイト<sup>(12)</sup>をご覧ください。

事実、ローレンさんは、カリフォルニア大学（UC）サンディエゴ校でのライブラリー・アシスタントとしての仕事を出発点に、UCバークレー、ライス大学と図書館の仕事を続け、その後、現在のメリーランド大学にやって来たという。キャリアは30年にもなる。

この後、労働運動関係の資料に詳しいということで紹介され、話をうかがったトーマスさんも、メリーランド図書館に来るまでに、大学図書館、組合資料館、州の図書館と渡り歩いて来たそう。この間、図書館関係の大学で講義をしたこともあり、アーキビストとしてのキャリアは23年になると言っていた。このトーマスさんの経歴の中にある組合資料館というのは、今日私が訪問してきたミーニー・センターの資料館だ。サラさんの先輩に当たり、彼女のこともよく知っていた。

トーマスさんは、アメリカの労働関係資料館について詳しく、ヨーロッパの労働関係資料館

のいくつかについてもご存知だった。そして、私に強く薦めたのがワシントン郊外にあるアメリカ・カトリック大学にある特別コレクションの訪問だ。

これはアメリカ占領軍の一員として日本の労働改革に関与し、その後国際自由労連のスタッフになったRichard L. G. Deverallという人の持ち帰った当時の文書類のコレクションである。占領期の労働改革についての貴重な資料だということで、「是非見るべきだ」と私に強く薦めた。

こうして、アメリカ・カトリック大学の特別コレクションを訪問することになった。しかし、翌日、特別コレクションが入っている「Life Cycle Institute」を訪問したが、扉が閉まっていた。押しても引いても動かない。どうやら休みのようだ。残念ながら、土曜日は休館のようだった。やむを得ず、あきらめて帰ることにしたが、いつかは再訪したいものである。

（以下、続く）

（いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授）

---

(12) 全米アーキビスト協会のホーム・ページ <http://www.archivists.org/>を参照。